北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

# 現代言葉遣い小考(十)：国語を教える者の自戒のために



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-01-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 後藤, 秋正<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.32150/00007224 |

# 現代言葉遣い小考（十）

## ―国語を教える者の自戒のために―

後藤秋正

一回限りの掲載という心づもりだったのが、十回を数えることになった。ずいぶんとピントのはずれたことも書いただろうし、不快な思いをされた方もあっただろう。その点については幾重にもお詫びしなければならないが、拙文を読んで御意見を寄せてくださった方々には心から感謝している。また、某出版社からは単行本にしないかという誘いの手紙（あちこちに出しているのだろう）をもらったが、経費のこともあって決断がつかないまま放ってある。

さて、数人が分担して行う「人文社会科学基礎論」の講義で、漢字に関する基礎的な知識について話している。「『漢字』とはどういう意味か」、「漢字はいつごろどこで生まれたか」、「漢字は全部で何文字あるか」、「現在使用されている日本の漢字と中国の漢字との違いは」、といった他愛のないテーマを取り上げ、時には「絵」「菊」の音読みと訓読みは何か、などと聞いて学生諸君の反応を見ることを楽しみにしているのだが、講義が終わって感想を書かせると、多くの学生が、お世辞混じりではあろうが、「初めて知って役に立った」などと書いてくる。ためにならなかったと書かれるよりはうれしい。しかし、不安になってくることも事実だ。拙文を目にする学生や卒業生が、多少とも言葉に関心を抱いてくれることを念じつつ、今回も掲載してもらうことにした。

①大屋幸世『蒐書日誌四』（皓星社、二〇〇三・一一）

●九頁「ランボー詩集とは、……を所収したものである。」

「所収する」という動詞はないのだ。一三頁では、「『様々なる意匠』所収の改訳」と正しく使っているのに、一〇〇頁には「全二二篇所収である。」とも言う。所収も収録も区別がついていない。

●一二頁「本分の叙述を書き換えようとしたが、……」

「本文」の誤植だろう。二八七頁「講談社文芸文庫、竹西寛子『兵隊宿』（昭3）」の（昭3）は、（平3）の誤植。ちなみに単行本は一九八二年（昭和五七）に出ている。

●二九六頁「岩波文庫『孟子』」
愛書会で、文庫本がすべて百円の店があったと述べた後に、『孟子』離婁章句上からの引用がある。ところが原文・訓読とも杜撰。原文の「眸子」の「子」が脱落している所があるし、訓読は「其の」とすべきところをどういうわけか、すべて「の」を省いてしまっている。『蒐書日誌』は一から読んでいるが、この四冊目は、「あいかわらず」と書けばいいものを、「相不変」などとしてあり、嫌味に感ずる。

②横田順彌『古書ワンダーランド①』（平凡社、二〇〇四・一）
●三七頁「諸君は今から七十年前、菌ち一八六九年、……」
藤岡俊三『幌馬車白虎隊』（東光堂、一九四〇）から著者が引用した部分。この「菌ち」が読めない。「すなわち」とあるはずのところだろうが、類似した漢字も思いつかない。ただの誤植なのだろうか。と、ここまで書いて気づいたことがある。一五三頁に紹介されている松山正中『花柳病療養法吾輩は淋菌である』（新橋堂、一九一一、四刷）の書名が、一九一頁と一九二頁では『吾輩は淋即である』となっているではないか。つまり、「菌ち」は「即ち」の誤植だったのだ。しかし、即を菌、菌を即に変換してしまうワープロというのも珍しい。
●三七頁「ゴールド・ヒルに住みついたおけいは白人にもて遊ばれ悪い病気をもらい……」
とうとう実例を発見した。漢字で書くのなら、「玩ぶ」か「弄ぶ」が正しい。一三二頁「問違えた」は、単に間違えたのだろう。

③㈲S工務店のチラシ（二〇〇四・二）
●「排雪・屋根の雪降し請け賜ります。」
町内に配布されたもの。「受け賜ります」と「承け賜ります」は見たことがあるが、これは初めて見た。「承ります」の新種。「雪降し」も「雪下ろし」ではないか。

④出久根達郎『二十歳のあとさき』（講談社、二〇〇二・一）
●「あれはね、大将じゃない。大正だよ」
「自伝的青春小説」と銘打たれた一冊。中に、次のような会話がある。「大将」は、三ちゃんが働いている古書店の店主。
「大将っていえば、三ちゃんのご主人だけど、どうして皆、ああ呼ぶわけ？」
「あれはね、大将じゃない。大正だよ」
「大正？」……
「なあんだ。僕はてっきり大将だと思っていた」
「大将」と「大正」は、少なくとも東京では、アクセントがはっきりと異なる。茨城県出身の著者が誤るわけがない。いかにも作り話めいた会話だ。

⑤「インタビューをおえて」（「彷書月刊」一九九九年三月号）
●九頁「島崎博さんは—台湾の生まれで本名は傳金泉。日本では結婚した夫人の姓を使っていた。名前の博は台湾姓傳を日本字にしたものである。」
この文の二箇所の「傳」には「フ」とルビが振ってある。島崎という人は、『定本三島由紀夫書誌』を編纂した人との

こと。傳は傅の誤りであろう。しかしどうして傅を日本字にすると傳になるのであろうか。傅は、音はフ、もりやく、つく、かしずくなどの意味がある。傳（伝）とはまったくの別字である。前回も書いたように、天下の？岩波文庫も間違える字だから仕方がないか。

⑥細野不二彦『ギャラリーフェイク20』（小学館、二〇〇〇・一一）

●一七三頁「ではあんた、この毒島を愚弄しに来たのか？」

「愚弄」の誤植だろう。見過ごしそうなところではある。

続いて、『ギャラリーフェイク』の誤植特集。まず、一五巻。四四頁「戦争の非惨や残酷」は、「悲惨」。六〇頁以降に頻出する「王侯貴族」は、「王侯貴族」。一八巻九〇頁「けんけんがくがく」は「侃々諤々（かんかんがくがく）」。これが喧々囂々（けんけんごうごう）と侃々諤々の混合語？であることは以前にも書いた。一九巻、「臥褥」に「ガジン」とルビが振ってあるのは「ガジョク」。一七二頁「鹿射香」に「ししゃこう」とルビがあるのは、不思議だ。たぶん「麝香（じゃこう）」の誤りだろう。一文字の「麝」を分解して二字にしてしまったのだ。二四巻五頁「こんな人手の多い季節に花見したって……」は、「人出」。五二頁「両国に有意議なこと」は、「有意義」。一〇一頁「凝灰岩や玄武岩から成る、幻想的奇岩郡」は、「奇岩群」。二六巻一八五頁、老漁民の姓の「會」に「そう」とルビが振ってある。これは漢字が「曾」の誤り。同じく一九六頁、「鱚血文」に「ぜんけつもん」とルビがある。「鱚」が正しいとしたら、これは国字だから、「きす」という訓しかない。これは「鱔」の俗字である「鱔」の誤りではなかろうか。うーむ、春休みに漫画ばかり読んでいたことがわかってしまう。

⑦「えりも土砂くずれ」の記事（「毎日新聞」二〇〇四・三・一八朝刊二三面）

●「不通の代替え道トンネル開放へ」

とうとう、代替（だいたい）が「代替え」になってしまった。

⑧仙台筋弛緩剤事件判決の報道（ＨＴＢ「モーニング」二〇〇四・三）

●「鑑定人という範中の人ではなく……」

警察が、押収したサンプルを、分析するためにすべて使いきってしまったことに対する某氏のコメントの際に出たテロップにあった。醤油が正油になりつつあるように、「範疇」も廃字になってしまうのだろうか。民放ばかりではない。四月三日正午からのＮＨＫニュースでは、大阪で起こった、回転式遊具で遊んでいた子どもが指を切断した事故を報ずるテロップでは、「実況見分」となっていた。「実況検分」ではないのか。

⑨井上靖『白い風赤い雲』（角川書店、一九五七・四）

●三二三～四頁「卓次は手洗所の傍で川岸君に、『おい、姉ちゃんのお嫁入りするところ見に行こうか』と声をかけた。すると川岸君は、急に真顔になって、『見れるかな』と言つた。『見

れると思うな』自信はなかつたが、卓次は答えた。」
いわゆる「ら抜き言葉」の早い使用例か。二一八頁の、卓次と小父さんの会話にも、「『滑走するところ見れる?』『そりや見れる』」という例がある。卓次は、銀座にバスで出られるところに住んでいる十歳の小学校四年生という設定。

⑩高橋輝次「序文・すいせん文の話」(『編集の森へ――本造りの喜怒哀楽』北宋社、一九九四・六所収)

●二八〇頁「世話好きの人柄が伺われて……」
「窺われて」ではないのかしらん。同じ頁に、「文人同士の交流が伺えて」、二八二頁には、「著者との関係がよく伺える」というのもある。

●二八二頁「壮々たる有名な人の序文」
「壮々たる」という言葉はない、「錚々たる」だろうね。

⑪大岡昇平「ゴルフ殺人事件」(『最初の目撃者』集英社文庫、一九八二・二)

●一七七頁「県警から出張した警部は、……荻原には用捨しなかった。」
「用捨」は、「必要なものを用いることと不要なものを捨てること。取捨。」(『辞林』21)。「容赦」だろう。果たして、大岡昇平の原文どおりなのだろうか、文庫化する際に誤ったのだろうか。同書所収「真昼の歩行者」の二四〇頁「恐らく贋札行を使する」は、「贋札を行使する」の単純な誤植。

⑫小樽の菓匠N屋の店内貼り紙(二〇〇四・四・二五)

●「べこ餅、地方発送賜ります」
岩内の美術館などを回った帰途に、いつも串団子を買う店に立ち寄った。「地方発送の御下命を賜ります」の省略形か、それとも「承ります」を誤ってこのようにしたものか。このままでは意味が通じない。

⑬岩重孝『ぽっけもん6』(小学館ビッグコミックス、一九八三・四)

●三九頁「大賞(賞金一〇〇万円)核当作なし」
もちろん「該当作」が正しい。ある会議で、年配の先生が、該当者をカクトウシャと読んだ(某氏によれば、センター入試の監督者がこのように読んだこともあったとのこと)のを思い出した。この漫画、確かに青年期の真実の一面を突いている。

⑭松永伍一「胸のなかにひろがる空白」(植田康夫編『読書大全』講談社、一九八五・四所収)

●一二九頁「執っこく」
うーむ、「しつこい」を漢字で書くとこうなるのか。本当だろうか。

⑮小川和佑「校訂に参加した体験」(前出『読書大全』所収)

●三五四頁「それは文学全集がもはや読書人たちの専有物を離れて、茶の間の中の存在を意味する現象だった。」
「存在になったことを意味する」と直せば意味が通るようになるだろうか。三五五頁には、「個人全集では小学館版の『萩原朔太郎全集』と『白秋全集』が最初に読んだ個人全集だった。」とある。全集を同時に二種類「初めて」読むというの

も解せないが、「個人全集」の語が一文中に二度も出てきてうるさい。また、同じ頁に、「あの昭和十年代の後半にヴァレリィの全集が出ていることが奇蹟のようなのだが、この全集刊行には、当時筑摩書房編集部に勤務していた仏文学者の斎藤正直前明大学長が傾注した情熱の所産だった、と後年人伝てに聞かされた。」という一文もある。この文章の主語はどこにあるのだろう。「には」を「は」にしたら意味が通るか。この人が校訂したという書物は信用しないほうがよさそうだ。

⑯「女と愛とミステリー　25時15分の首くくり」（TVh、二〇〇四・七・一〇、夜九時から）

●「投身自殺」

この言葉自体はどうということはないのだが、双子の姉妹の姉が妹を鈍器で撲殺した後、死体を、自殺を装ってビルの屋上から落としたことをめぐって、刑事どうしの会話（この段階では自殺と思われている）があり、「ビルの屋上から身投げ」のあとに「投身自殺」などと続く。投身自殺というのは、川や海など、要するに水中に身を投げることだとばかり思っていた。しかし、『辞林21』の「投身」の項には、「水中に飛び込んだり、高い所から地上に身を投げたりして自殺すること。身投げ。」とあって、高い所から身を投げることも投身と言うらしい。同じく『辞林21』の「入水」の項には、「水中に飛び込んで自殺すること。身投げ。」とあるから、投身も身投げも、飛び込む先が水でも地面でもかまわないらしい。でも、ビルなどの場合は、飛び降り自殺というのではないかなあ。しっくりしない。

⑰「月曜ミステリー劇場　自治会長・糸井緋芽子『憧れの本社に栄転！』」（HBC、二〇〇四・九・六、夜九時から）

●「自治会長」

この言葉を主人公役の泉ピン子が、ジチカイチョウと言ったり、ジヂカイチョウと濁って言ったりする。泉ピン子の夫役の高田純次も同じ。甚だしいときには、「ジチカイチョウ、ジヂカイチョウがしっかりしなくては」などと言ったりする。他の俳優達がすべてジチカイチョウと発音していただけに、聞き苦しいことこの上なかった。

⑱『文房具の研究―万年筆と鉛筆―』（中公文庫ビジュアル版、一九九六）

●七頁「筆記用具にしても、鉛筆とペンに代表される以前と比べるとその種類も増え多様化の時代、……。いつどこでも手軽に書けるボールペンが加わり、書いて消せ、芯を削らなくても細書きシャープペンシル、気軽な筆記具サインペン」

わかりにくいぎくしゃくした文章だ。安易な名詞止めがその原因だろう。とりわけ「書いて消せ、芯を削らなくても細書きシャープペンシル」がおかしい。せめて、「芯を削らなくても細書きできる」としてほしい。

⑲森本梢子『研修医なな子6』（集英社、一九九九・九）

●一〇〇頁「韓魏趙斉秦楚嘗燕!!」

なな子が、病棟の飲み会の二次会で看護婦さんたちに連れ

て行かれた「おかまバー」（文中にこのようにある）の、香港から来ている従業員が発した言葉。作者（「しょうこ」ではなく、「こずえこ」なのだ）は、なな子にとって、何がなんだかわからない中国語をこのように表現したのだが、「嘗」がわからない。これがなければ、戦国の七雄の国名なのだが。

●一四四頁「K中央病院でも、もともと細からしい指示が好きな副院長によって、細からしい見直し要項が作成されたのだった」

「細からしい」が意味不明。細かくていやらしいの短縮形か。次頁の「患者の性名は必ずフルネームで声に出して確認する」、「上下関係」（『研修医なな子7』同、二〇〇〇・三）は、単なる誤記。

⑳武田百合子『富士日記（中）』（中公文庫、一九八一）

●七二頁「犬の手をすいてやる。」

これは校正の時に見落としそう。漢字の字形が似ていて誤りやすいことを、「魯魚の誤り」、「亥豕の誤り」、「焉烏の誤り」、「帝虎の誤り」などとさまざまに言うが、「毛手の誤り」というのがあっても良さそうだ。もちろん、「犬の毛」が正しい。

●八五頁「主人（＝武田泰淳）はまだ気分が悪いらしく元気なし。……眠入っていたり、ただ眼をつぶっていたり。」

「寝入って」ではないか。

㉑周良貨・能田茂『監査役野崎修平11』（集英社、二〇〇二・五）

●一九四頁「冗談じゃない　奴は総会屋だ……　両刃の刃だという事がわかりませんか」

以前にも取り上げたことがある。「両刃の剣」だね。

㉒岡崎二郎『国立博物館物語①』（小学館ビッグコミックス、一九九一・一一）

●四三頁「僕が初めて化石と出会ったのは、貢岩だった。」

新東京博物館に研究員兼雑用（係）として勤める森高弥生に館長が言った言葉。「出会う」は「出合う」だろう。「貢岩」の「貢」に「けつ」とルビが振ってあり、欄外の注に、「堆積岩の一種。薄くはげる性質のあるもの。」と言う。これは「頁岩」の誤り。頁は、あたま、うなじといった意味の場合は「ケツ」と読み、書物の紙の片面といった意味の場合は「ヨウ」、俗にページと読む。『辞林21』には、「【頁岩】泥土が水底に積み重なって固まったもので、板状にうすくはがれやすい泥岩。泥板岩。」とある。紙のようにはがれやすい岩ならば、本来、「ようがん」と読むべきものではなかったか。と、これは単なる臆測。

㉓澁澤龍彦『世界悪女物語』（河出文庫、一九八二・一二）

●二一五頁「〔王〕皇后に息子がなく、妃であった蕭氏に皇帝の寵が移りかけていたので、……」

この「蕭氏」に、「しゅくし」とルビが振ってある。「蕭」には「ショウ（セウ）」という音しかない。「粛」（シュク）と混同しそうなところではある。

㉔東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報「明日の東洋学」（第12号、二〇〇四・一〇・三〇）

●「史料編さん所助教授」

八頁だけのパンフレットだが、装幀も洒落ていて読みやすく工夫されている。しかし、このパンフレットを手にする人が、「編纂」という漢字を読めないとは、とても思えない。

㉕細野不二彦『ジャッジ2』（双葉社アクションコミックス、一九九一）

●七頁「これが最後のご奉行と思ってガンバレや!!」

「ご奉公」だろうね。

●一二二頁「死後　彼女の長きくるしみを鑑み―」

「……を鑑みる」という使い方をする人が増えた。「苦しみに鑑み」としてもらいたい。『ジャッジ1～2』は、二〇〇三年から単行本が出ている同じ作者の『ダブル・フェイス』の原型となった作品。前者の主人公である「昼行灯」の会社員、逢魔法一郎が、実は「闇の司法官」という設定なのに対して、後者の主人公は消費者金融会社に勤めているサラリーマンだが、実はこの会社のオーナーでもあり、ドクター・フーという「闇の債権回収人」でもあるという設定になっている。後者の方がオカルト色は少ない。ただ、両者とも、主人公が裏の仕事に取りかかる際のセリフにおかしなものが多い。『ジャッジ2』の一〇〇頁、逢魔が悪人を処罰する時のセリフ、「鬼畜ノ所業ハ赦サレマジキ」などは、この一文の後にまだセリフが続くのではないかと思わせるが、これだけで終わっていて、意味不明である。まだしも、「赦サレマジキハ鬼畜ノ所業」というのならば理解できるのだが。

㉖「どさんこワイド208」（STVテレビ、二〇〇四・一二・四、夕刻五時半頃）

●「注目はバッグ」

リサイクル着物が、安価で喜ばれているという報告。女性レポーターが和服を着て、さまざまな和服（一万五千円程度の品物が多く、確かに買い得と思える）を紹介した後で、「中でも注目はバッグ」と言う。このような言い方は舌足らずに聞こえる。学生の文章でもしばしば見かけるようになった。どうして、「注目されるの〔商品〕は」「注目したいの〔商品〕は」などと動詞を補って言わないのか。「サンデーモーニング」（HBCテレビ、二〇〇四・一二・五午前）でも、プロ野球OBのオールスター戦が行われたことを伝えるのに、「西鉄のユニフォーム姿で登場は、……」などと言っている。これも、「登場したの〔人・選手〕は」と言わない。その後、父親がUFOキャッチャーのUFOの役をするテレビ番組で、「熊本?から挑戦の〇〇さん」などと言っているのも耳にした。「挑戦する〔される〕」とは言わない。学生の舌足らずな文章の原因は、案外、こんなところにあるのかもしれない。

㉗「学生諸君のレポートから」（二〇〇四・一二）

●「漢字の成り立ちや発祥の仕方」

「祥」は、めでたいきざし。「発祥」は、もともと天命を受けて天子となるめでたいきざしを現すことを言う。そこから、「物事が始まり起こる」（『新字源』）ことを言うようになった。さて、「漢字の発祥」と言うだろうか。別の学生は、「漢字の生誕」とも書いている。

●「話述」
「話術」の誤り。この学生は、「躱す」というむずかしい漢字は書けるのに、不可解だ。
●「漢字が主要の講義」
「漢字が主要なテーマの講義」などとならないものか。この学生は、「先生の講義によって意志を新ためた。」とも書いている。教壇に立つ姿を想像すると、ぞっとする。
●「日本人の名前は大低漢字である。」
「大抵」と書くつもりだったのだろう。
●「著者」
「著者自身、小学生の頃に漢字を覚えるのが苦痛だった。」という文脈で登場する。レポートを書いている自分のことを著者とは。「筆者」と書くつもりだったのか。今年度のレポート提出に際しては、「講義」を「講議」と書くような者には、絶対に単位を与えないと強調したためか、その誤字はなかった。
㉘「道内ニュース」（NHKラジオ、二〇〇四・一二・一八夜七時一五分ころ）
●「にけた」
日ハム金子投手が契約更改に臨んだというニュース。四千万円アップの一億五千万円を保留したらしい。この時に、アナウンサーが「にけた」と言う。何のことかと聞き耳を立てると、今年十三勝をあげた金子投手は三年連続して「にけた」勝利なのだそうだ。ひとけた、ふたけた、みけたとは言うが、いちけた、にけた、さんけたとは言うまい。二度も言うので、回転寿司屋から帰宅途中の車内で、家族全員が首を傾げたことだった。
㉙田島隆・東風孝弘『カバチタレ14』（講談社モーニングKC、二〇〇三・一二）
●九六頁「真木さんの店で食虫独にあたって大損害をこうむった」
見過ごしそう。食中毒。
㉚轡田隆史『隋唐以来官印集存』（『彷書月刊』一九九一年八月号）
●一四頁「……タクラマカン砂漠を西に向かった旅の道筋は、『史記』にまで逆のぼる古人の旅のそれにほぼ重なるはずであった。」
「逆のぼる」は、いけない。漢字で書くのならば、「遡る」か「溯る」にしてもらいたい。個人的には、河川をさかのぼるときには、「溯る」、陸地をさかのぼるときには、「遡る」としているが、根拠があるわけではない。一五頁には、「一九一一年、辛亥革命」とある。これは、「辛亥革命」の誤植。和田桂子「妻と夫の掘り出し本」（同）の一六頁には、「以外な人物が投稿している」とある。これは「意外な」の誤植。
㉛池谷伊佐夫『神保町の蟲―新東京古書店グラフィティ』（東京書籍、二〇〇四）
●二〇頁「洋雑誌専門のダンテという店があり、『プレイボーイ』や『ライフ』、『ニューヨーカー』などの古いところをずらっ

と置いていた店があったのだが、……」

後半の「店があった」は、不要。

●六三頁「お年寄りを粗末にするのは、文化財の冒涜なのだろうが。」

小生のワープロやパソコンでも、「ぼうとく」と入力すると「冒涜」と出てきてしまう。「冒瀆」でなければ、おかしけがすという意味がとれない。賣が売になったので、讀が読になったように、機械的に「涜」としてしまったのだ。「潑剌」も「溌剌」では元気が出ない。一九五六年に国語審議会報告「同音の漢字による書きかえ」が出て、奇蹟が奇跡に、諷刺が風刺に、悧巧が利口に、肝腎が肝心になどと書き換えることになったのは知っていたが、やはり違和感がある。それだけ古い人間になったということだろうか。そういえば、森鴎外（森鷗外）は、どうなったのだっけ。

●八六頁「『色葉字類抄』鳥渕和／編　勉誠社」

西秋書店内部の詳細なイラストにつけられた手書きの説明の一つ。／という符号の意味は分からないものの、「鳥渕和」は馬渕和夫の誤りではないかと思ったのだが、勉誠社から出た高価な『色葉字類抄』は、馬渕先生が編まれたものではない。馬渕先生の教え子である同僚のY先生も知らないと言う。誰のことだろうか。

※蛇足〈其の一〉

本誌第七号に載せた拙文の「前書き」の一部が、本学釧路校の二〇〇四年度入試問題として出題された。少々長くなるが、正式には、「地域環境教育課程地域社会システム分野推薦入学小論文問題」である。文科系に進学するのなら、国語専攻などという流行らない分野はやめて、法律か経済にしたらどうかという進路指導の高校教師の勧めを断って漢文ゼミに入ってきたTさんの話である。受験生諸氏はTさんの行動にどのような感想をもったのだろうか。

※蛇足〈其の二〉

今年も教育実習が始まり、札幌市南郊のM中学へ研究授業の参観に行った。草野心平の「河童と蛙」の授業で、この詩を、情感をこめて群読するというのが一時間の目標。詩中に「ぐるりの山々」とあって、このアクセントが、範読する教育実習生も一年生の生徒達もどうもおかしい。授業が終わった後、校長室で雑談した時にこれを話題にした。しかし、「ぐるりとまわる」と「ぐるり（まわり。周囲）の……」の「ぐるり」ではアクセントが違うということが、なかなか理解してもらえない。指導用に制作されたCDでも後者と前者の区別はないという。別に北海道のアクセントの悪口を言おうとしているわけではなく、少なくとも東京近辺（静岡県東部でも）では区別があるのだということを理解してもらいたかったのだが。草野心平は福島県生まれ、磐城中学の出だから、区別していたと思うのだが、どうだろうか。

※蛇足〈其の三〉

二月初旬のとある夕刻、家で仕事をしていたら、Mさんから

電話が入った。会ったことのない女性である。本学の美術科を出て、小樽で高校の美術科講師をしているとのこと。何事かと思いながら耳を傾けると、最近の北海道新聞を読んだかと聞く。要約すると以下のようなことだった。一月二十八日付けの各誌朝刊に、財団法人総合初等教育研究所が実施した小学生を対象とする「漢字の読み書き調査」の結果が載った。その中で、最も書けなかった漢字として挙げられているのは、小四では、「まるい形」の「まるい」、小五では、「もとを正す」の「もと」。ここで正答とされたのが、前者は「円」、後者は「本」である。しかし、どうして「丸」と「元」ではいけないのか、道新に問い合わせたが取り合ってくれないというのだ。あわてて手近にあった該当記事(授業で使おうと思い、たまたま切り抜いてあった)を見ると、確かにそうなっている。また、「学年別漢字配当表」を見ても、「円い」は小一、「丸い」は小二で、「本」は小一で、「元」は小二で学習することになっている。どうしてこちらが不正解なのかわからない。「先生だったら丸と元はバツにしますか。」と問われたので、「しません。」と答えた。調査の詳細は不明ながら、記事にも「『円い形』を『丸い形』と書く—などの例が見られた。」とあるから、「丸」と「元」は不正解とされたことは確かだ。数日後、Mさんはこの件を朝日新聞に投書したといって、その文章と御自身が開いた「木版画展」の案内パンフレットを送ってくれた。これに印刷された、大木の姿を彫った作品など大変にすばらしいので、小さな額に入れて居間の窓辺に置いてある。

※蛇足〈其の四〉

四月(二〇〇五)中旬、中国で日本の国連常任理事国入りなどに反対するデモが頻発していた頃、あるテレビ局がこれを報道する際に、五・四運動と関連づけていた。五・四運動とは、一九一九年五月四日、第一次世界大戦の戦後処理を協議するパリ講和会議で、日本の「対華二十一箇条要求」が承認されたことに抗議する学生デモに端を発した、反帝国主義運動である。アナウンサーはこれを、「ゴーテンヨンウンドウ」と言う。「ニーテンニーロク」、「ゴーテンイチゴー」、「キューテンイチイチ」、こんな読み方もしばしば耳にするようになった。小数を読むわけではあるまいに。せめて「ゴシウンドウ」という呼称だけは変えないでもらいたいものだ。